

昭和十二年（一九三七年）

に急ぎよ、帰国することになった。ホノルルから「エンブレス・オブ・カナダ」号に乗って神戸に着いた。

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
じ げん めん く え

④

療養生活はヒロにある公立のサナトリウムで送った。母が言つには、風邪をひいてゐるのに自分でドライブし山奥にまで説教にいったらしく、無理がたつたのであろう。米國では当時、結核患者が出ると、住んでいた家は全部壊し、燃やしてしまつた。

父の実家のある広島県の郷分に行った。そこでいくつかのカルチャーショックを受けた。第一はくみ取り式トイレ。第二は牛の糞やフナなど農家

日本流の生活戸惑う

母が特訓、図工は得意科目

のカルチャーショックを受け

た。第一はくみ取り式トイレ。

第二は牛の糞やフナなど農家

のにおい。第三が川に魚がい

ることだった。小川をせき止

めて小魚やワナキを捕ったり

した。ただ、困つたのは、刺

し身やたらに、塩辛の類で、

今でも少し抵抗感がある。

私は最初、英語でしゃべつて、

を去る時に、友達が「さよなら、さよなら」と言つて手渡

してくるものがあった。手

を開いたら二錢玉があった。

こうした友情の経験はハワイ

ではなかつたので、その時の

印象は今でも残っている。

当時の私はいわゆる帰国子

女のような存在だが、日本の

田舎に比べハワイの方がはる

かに進んでいるというのが実

学費を作った。ハワイへの恩

返しと思つたのであろう。

日本の男にしたいという親

の見栄みだいなところから、

母による勉強の特訓が始ま

た。例えば工作の宿題では、

「こういうふうにするのよ」と

と手本を示す。それを学校に

持っていけばよいと思つた。

などを作つたりした。

三年の二学期には級長にな

つた。担任の先生が父母会で、

ハワイの帰国子女が短期間で

級長になったとほめたものだ

から、母は鼻高々だつたらし

い。ひどい母親だと思つた時

もあったが、おかげで競争と

いうものを覚え、結果的に私

にリーダーシップをとることを教えた。

三年生の時には伝

通院のボーイスカウトに入れられた。私

は当時、腕力もあり、

子供の中でも強かつたから、それが肉體

的自信にもなった。小学校で

は相撲部に入り、五年生の時、

朝日新聞の健康優良児に選ば

れた。そのころは、あちこち

の町内で子供の相撲大会があ

り、その大会に出場して優勝

し、鉛筆など賞品をもらった

こともあった。

特訓の成果あって図工が好

きになった。のこぎり、ノミ、



作者の姿のボーイスカウト